

「いらっしやいませ」

「クリーニングをお願いします」と言って、カウンターに洗濯物を乗せた。

「当店のご利用は初めてですか？」

「はい、そうです」

「ではお名前とご連絡先をお願いします」

「サカイです。電話が三六三―八一五一です」

「サカイ様の漢字は、坂道の『坂』に井戸の『井』でよろしいですか？」

「いいえ、さんずいの『酒』という字に井戸の『井』になります」

「はい、わかりました・・・」店員は早速受付票に酒井の名前を記入して、洗濯物の仕分けを始めた。

「スカートが一枚、こちらはドライクリーニングのスタンダードコース、シルクのセーターが一点、こちらはエクセレントコースになります。ワイシャツが三枚、ズボンが二本、こちらはスタンダードコースです。それからダウンコートが一着ですね。こちらはエクセレントコースになります。以上八点でよろしいでしょうか？」

「はい、結構です」

店員は記入を終えると、電卓に金額を打ち込んで会計を始めた。

「ドライクリーニングの物は、明日の午後三時以降ならお渡しできます。エクセレントコースの物は水曜日の仕上がりになりますので」

「水曜日ですか？ もう少し早くなりませんか？」

「お急ぎでしたら、エクспレスコースにすることもできますが」

「エクспレスコースでしたらいつでもできますか？」

「四、五日後の仕上がりになります」

「四、五日ですか・・・このシルクのセーターなんですけど、どうしても二十日に着る予定にしているので、なんとかそれまでにお願いできかないでしょうか？」

店員はカレンダーに目をやりながら、

「わかりました。こちらは大至急ということで、明日業者さんに話しておきます」

「お願いします。無理言つてすみません」

「それでは酒井様、お会計の方が全部で五千八百円になります」

酒井は財布から五千円札と百円玉八枚を取り出して店員に渡した。

「五千八百円丁度お預かりします。少々お待ちください」

店員はレシートと控えの用紙、それからサービスカードを差し出した。

「こちらは、サービスカードになります。スタンプが一杯になりますと、三十%の割引になります。それから、お誕生日にご来店いただきますと、全て半額になりますのでどうぞご利用下さい」

「わかりました。お願いします」

酒井はサービスカードとレシートと控えをもらって出口に向かい、

「ありがとうございました」という店員の声を背後に聞きながら店を出た。